

## リハビリテーション部臨床心理室

公認心理師 主任 和田 寿美

### はじめに

リハビリテーション部臨床心理室は、常勤の公認心理師2名体制でした。

回復期リハビリテーション病院の入院に1名、その他に1名を配しました。入院については4フロア8ユニットの入院患者を対象としています。その他とは、外来と、高知県からの委託事業である高次脳機能障害支援拠点センター青い空の業務です。

コロナ感染防止対策として入院と外来業務を担当者で分けることになりましたが、結果、業務整理につながりました。但し、フォローし合うことができないので、諸事情で担当者が不在となった場合には介入を休止せざるを得ないので、そのまま実績にも影響することになります。

### 実績について

○近森リハビリテーション病院

図1では、2023年の月別の新規患者数を示します。2022年比では入院が93%、外来は87%とわずかに減少傾向でした。

図2は、新規の入院患者29名の疾患内訳を、図3では、新規の外来患者33名の疾患内訳を示します。入院・外来ともほぼ同様に、7割が脳血管障害、2~3割が頭部外傷でした。入院患者については前年までと変化ありませんでしたが、外来では頭部外傷の割合が減り、脳血管障害の割合が増えています。

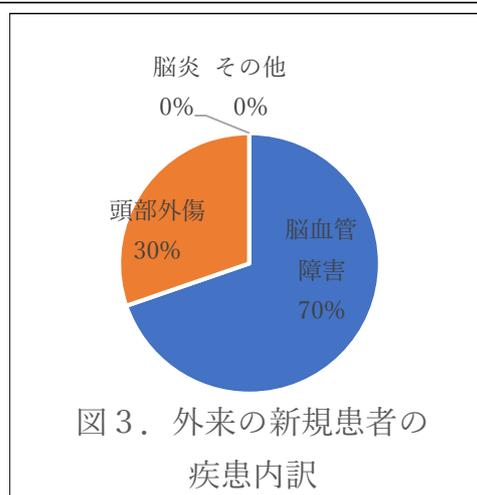
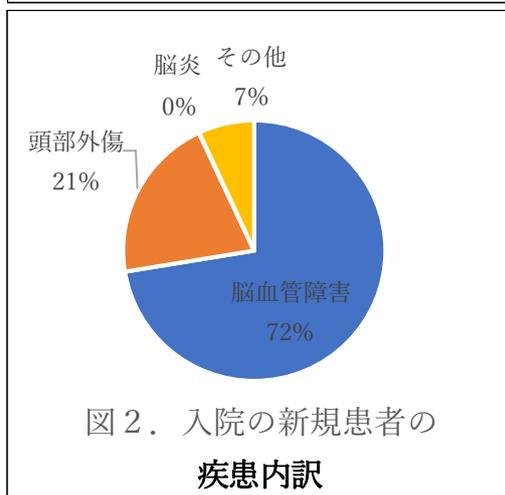
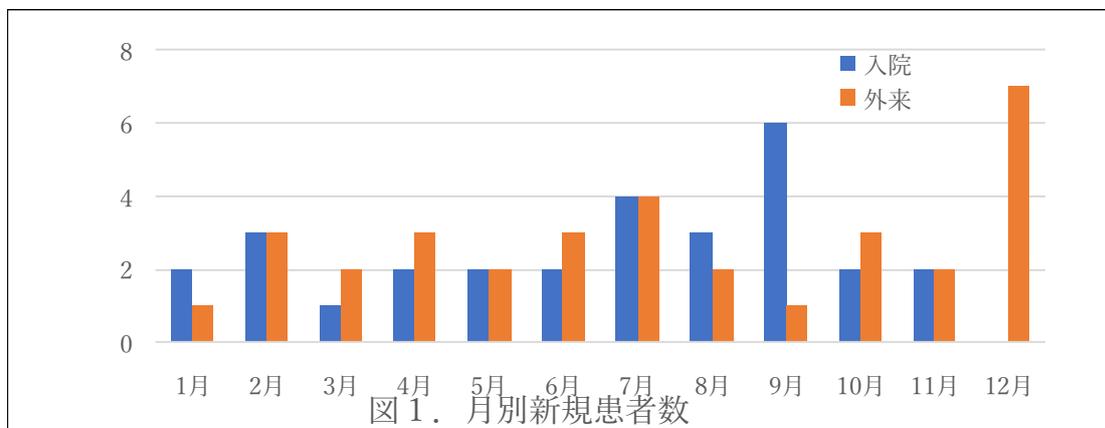
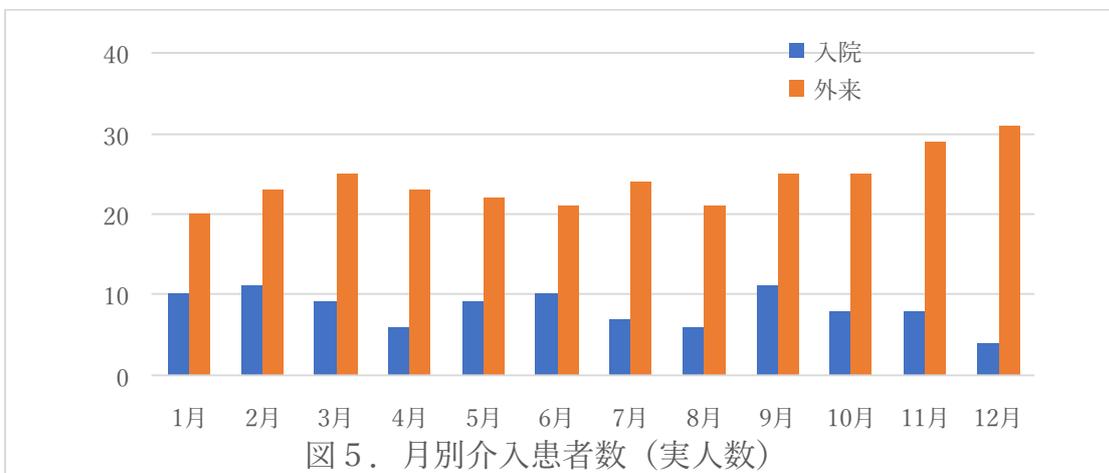
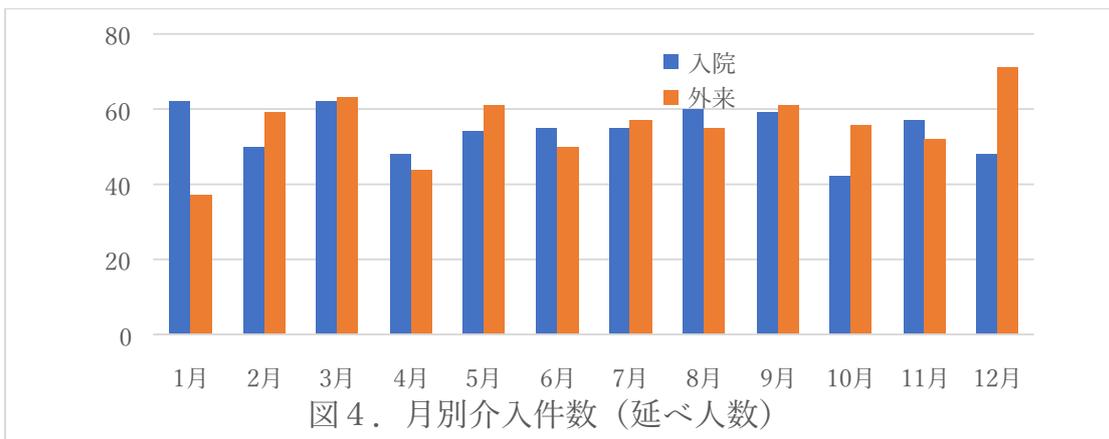


図4では月別の介入件数を、図5では月別の実人数を示します。1ヶ月平均の介入件数は、入院、外来共に約55件。1ヶ月平均の実人数は、入院が8.3名、外来が24名。前年比の約90%でした。介入件数も実人数も月による変動がありますが、患者層の変動、介入の依頼箋の増減によります。また、担当制のため担当者の勤務状況に影響されることもありました。

入院では、感染による対応（病棟閉鎖、隔離など）もあり、個別介入が困難な期間もありました。その際には、スタッフやカルテからの情報による間接的な行動観察となりましたが、行動範囲が限定され閉鎖的空間で過ごす患者の心理支援など、専門性を活かした対応を考えていきたいと思います。主業務としての神経心理学的検査の施行は、後遺障害としての高次脳機能障害を抱えた患者に対して、現状の認知能力の測定を目的としますが、職場復帰や自動車運転再開の時期を判断するための参考資料ともなります。回復期にいる患者の検査結果は、患者自身の認識と乖離していることが多いのですが、現状認識の促しやリハビリテーションへの動機づけになるよう、結果の解釈はもとより伝え方を工夫しています。また、発症/受傷後の抑うつ状態や将来への不安などを抱えていることも多く、精神心理面へのサポートというDrからの指示が増えています。

外来は、平日午前と水曜午後が対応枠です。回復期を経て生活期にある患者は、自宅等での生活を再開し日常を取り戻していく過程にあります。病院との環境の違いから疲労しやすさなど高次脳機能障害の症状によりやく気づき始める方もいます。その自我意識や現状認識の変化を捉えながら、社会復帰（職場や学校）の時期を見極めたり、周囲への理解や環境調整など合理的配慮の内容を考えたり、患者と家族のエンパワメントを支えていくことが、重要な役割と考えています。また、社会参加の手助けとなる精神障害者保健福祉手帳や障害年金申請の際にお手伝いもしています。



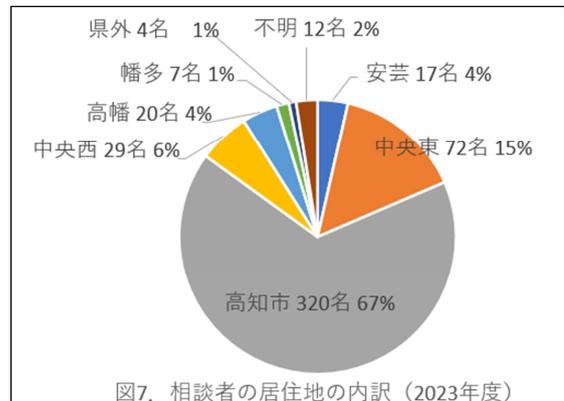
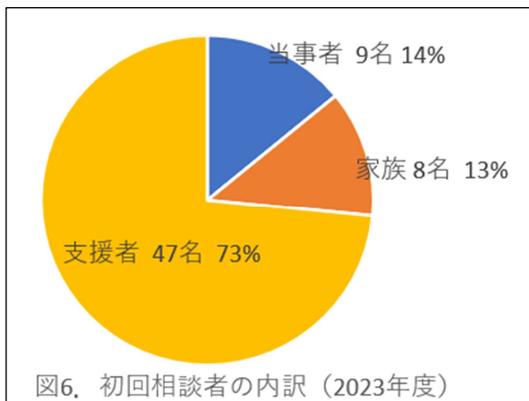
○高知県高次脳機能障害支援拠点センター 青い空

高知県内の高次脳機能障害に関する相談支援と普及啓発事業に取り組んでいます。支援コーディネーター等のスタッフは、NPO 法人脳損傷友の会高知青い空の3名（兼務；理学療法士2名、作業療法士1名）と当院の公認心理師1名です。

県の委託事業ということで年度区切りのため、今回は2023年4～12月の実績を示します。この期間の相談件数は合計481件、年々増加傾向にあります。初回相談者数は64名、その相談者内訳を図6に示します。当事者が家族より若干多く、支援者が約7割を占めました。支援者の割合が増えたことは、少しずつですが病院や地域の支援者に認識していただけたことの現れといえます。しかし、図7のように相談者の居住地を保健圏域別に示すと、合計481件の相談の内、高知市内からが圧倒的に多く、中央東圏域と合わせて8割を占めるという状況でした。人口の差があるものの、県中央部以外への浸透が不十分というのが今後の課題といえます。

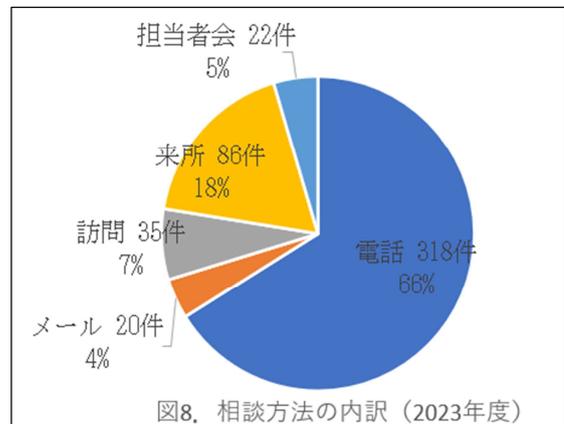
図8で相談者の相談方法を示します。訪問や担当者会などで外出していることも多いので、まず電話での連絡をお願いしています。相談の際には、当事者、家族、支援者が抱えてきた不安や不満を聞くだけでなく、障害や症状を理解し対応の工夫を一緒に考え、ここからつながりを作るということを大事にしています。

高次脳機能障害は、脳損傷の程度や部位による差はもちろんのこと、それまでの生き方や環境など個人差も大きいので、本当にお一人お一人の困りごとや困り感も異なります。当事者、家族、支援者に寄り添い、一緒に考えていくことを大事にしています。NPO法人脳損傷友の会高知青い空では、当事者・家族の支え合いのミーティングの場を持ち、当事者と家族、関心のある支援者が参加して語り合っています。家族会、女子会は毎月、中土佐町は奇数月開催です。また、啓発活動として研修会等を開催します。当センターの認知度向上に比例して、地域研修会の参加者数が増えています。家族教室は定期開催とし、広報にも力を入れたいと思います。



まとめ

患者(当事者)と出会うのは何らかの脳損傷を負った後となりますが、まずはそれまでに歩んできた生き方を肯定します。高次脳機能及び精神心理機能の状態を理解し、その人らしさを大事にしながら生きていくことを支援していきたいと思っています。患者を取り巻く環境要因である家族や支援者とも連携し、各人が安心して過ごせるようになると、互いの支え合いや生活への適応を促すこととなります。しかし、その過程も一人一人異なるので、心理士として心に寄り添うというのは基本且つ重要な仕事ですが、経験を積むほどに難しさを感じます。



心理職が公認心理師という国家資格となって5年が経過しました。人員不足も大きな要因ですが医療、福祉分野での認知度は十分ではありません。病院の中でも地域でも、顔が見える活動を意識していきたいと思っています。